

13
1245
6

曲亭主人編演

開卷驚奇

游俠傳

刊行去歲

與今年

請看孝義忠貞事

錦上添花維二篇

柳川重信繪畫

羣玉堂精刊



羣玉堂印

俠客傳

客傳第二集引

卷四

作稗史者其才不一而足矣夫才之為物猶
如木有淺深也淺則易觀深者不可測故才當
為不先者屈而為知已者伸既已屈於一時
之無知己而終者伸於數百年以後之知乃
才之難易與時之用捨之舉不若濛濛乎蓋古
古稗史之作唐山家為工緻然不得其法也
亦有怪怪復幻無星未足以物女子之筆統之
以勸懲一鳴之聲情態則文與情交玉焉文與情

史客傳第二集卷一

羣玉堂印

交至焉。則注意其要如自然。事物現幻者上及讀
而入佳境。耳如聽其言。目如觀其人。於是乎田
夫山妻。漁父牧豎。無不嗚咽唏噓。而不感歎。是
誠才子之書也。非帝王斯。巧拙耳。甲者其書亦至
利。能苟能讀。得史者。發人所昧。及發解人所不
能解。亮有看者。先已了了。至於其尤具眼如車
輪。以看其批者。才其其稀。有看者。隨得南鍼。到
彼岸。庶矣。其非異世之知己之資耶。嗚呼。豈已
當年尚難。得况于異世。誰亦思之。 皇朝素有三

得史。是謂策子物語。竹採字通保。務語源語者。
所謂古之得史也。後人玩之不措。但注解其詞。
不作批評。豈已之難。得不知也。唐山也者。其得
史。每傳奇。其大筆。必有批評。惟則有批評。成
其的。作者之隱微。而論辨其謬者。幾稀矣。以予
觀之。美羅貫中。三國演義。高東。嘉。琵琶記。獨
聲。山。毛氏。馬。標。新。傾。異。楚。家。解。疑。評。注。大。得。題。
其。山。又。於。琵琶記。復。評。中。錄。唐。恨。傳。奇。數。種。類。
同。以。為。補。天。石。因。其。一。曰。汨。羅。江。屈。子。墨。魂。其

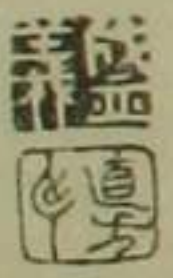
二曰博浪沙始皇中擊其曰太子丹蕩秦雪
 恥其四曰丞相亮滅魏班其五曰鄧伯通父
 子團圓其六曰荀奉倩夫妻諧老其七曰李陵
 重歸故國其八曰昭天復入漢關其九曰南宮
 靈許殺賀蘭其十曰宋德昭劫回趙普諸其氏
 類宜補古來人事之缺陷存乎所偏次使
 傳一書正與彼意暗合前集自序云若新田
 楠木二王忠至義以順討逆理必高誅滅是
 利氏奏恢復之功哀哉當人勝天之時第策不

好百戰為畫餅古來人事大可恨者莫復其
 此每嘆有方寸子之業本之于春秋心誅之文
 法而作雷恨之捍史者未之有也是予所以
 此舉自今而後看是也若不為後則知古
 來人事之缺陷錯其恨之為一大快編
 天保壬辰仲冬之吉甲子日題于神田廟東若
 作堂之南軒山茶花開雲

蓑笠漁隱



荻齋盛義書



開卷驚奇俠客傳第二集總目錄

壹卷

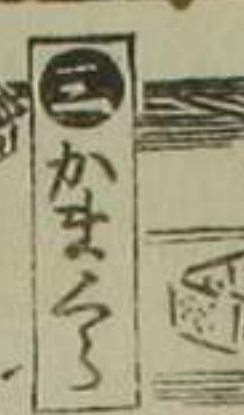
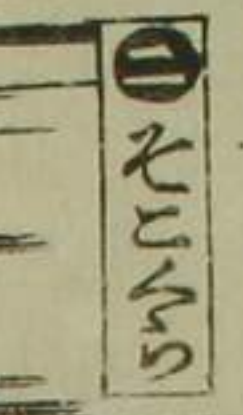
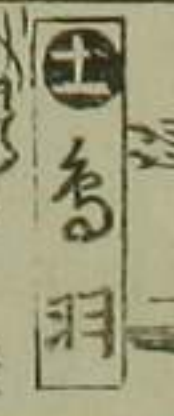
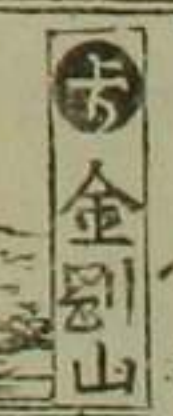
第十回 深林孤俠訴意衷
山莊眾僕諍舊功

第十二回 安同首喪溫泉舍
度吉淚濺節死場

第十三回 感義烈俠民斂身首
說靈夢聞人建墓表

第十四回 足柄踰長總伴奸夫
吉野山小六遇女仙

第十五回 齊統遺歌助則知德逸
臙帶志歲老樹話以往



貳卷

參卷

四卷

五卷

總目錄終

第十六回 不毛山麓路義士憐童女
野井地藏堂俠客避驟雨

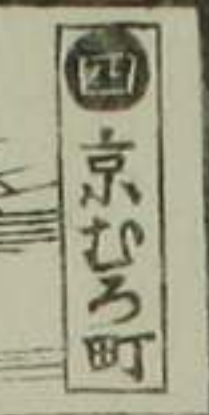
第十七回 滿泰駐駕見壯士
助則走馬捕奸黨

第十八回 裡應外合濫法
理論方正繫枉

第十九回 託鴻便義兒齋書信
避豺狼母女附海船

第二十回 姑摩姫夜夜禱神祇
九六媛月下譚劍俠

總目錄終 本集起應永十八年夏四月盡十九年春二月下旬但第二十回又起文中九年至應永十一年秋八月十五夜歲月有先后焉





稲城文作
守延守延のり

と柳
こけぬ
うらみち
春さむし
朝乃
無氷なひら
よる

登、稻城守延、
半阿道人半阿道人

山勝山勝
杉内杉内

像寶第八

公介田公介田
与記右与記右

五
三三三三三三



離德入、墓、南
馬、跌、光、鼠、何、
識、尅、中、生、
寶、北、畠、三、位、
玄同老人玄同老人

伊勢国司伊勢国司
北畠満泰北畠満泰

引板屋方引板屋方

像寶第七

依家傳曾、一、車、老、一

新酒霧

窮阨兩番才足免
小時了了大時佳
賢新酒霧
愚山人



木造木五介
泰勝持

像贊
第九

あつちのほまねとて人といへど
よはるかこゝありねの花暮笠

鈴笠の
小夜郎

長総





楠河内守
正元

いづか世を志のふともかかれ
仇と共形あ免れ下り
質楠正元 都并味人

英虞將曹

修賢第上



禪取
庶吉

勅風拔木乳猿
寒雨喪朋雁獨
凶吉去來無約束
分憂游俠似天資
質庶吉并老樹
著作堂 善作

老樹

満泰北
豊系北
島記本
満雅作
南朝記
及伊勢の
巻その中
身満泰
此の事
孰も早
也

俠客傳第二集列傳追加姓名目録

將相北白満泰 楠正勝 楠正元 上杉氏憲
 上杉憲重 二浦介時高 武士稻城守延 木造親政
 木造泰勝 英虞將曹 明星三郎 十布野左椀太
 宮尉手多天藏 足野井筒平 底倉喜我 柚本再九郎
 堂禪麻太郎 名湯回九郎 人雁鳥鬼右衛門 龍卷耳朶
 楫取度吉 隅屋維盈 僕隸山勝杣内 谷田與記右衛門
 奴隸厩介 敵介 孺豎庭鳥三女介 矜笠小夜二郎
 農樵 底倉仁兵 底倉義右衛門 底倉礼作 底倉智六
 底倉信三 底倉里長 石畳屋甲 五柳村長
 悪棍拐兒 婦人楠姑摩姫 老樹 引板屋 長総 縫殿
 緇流遊行上人 實證寺長老 寶珠寺智正 女行者音間
 神仙葛城九六媛 通計四十七名第一集姓名目録所載二十五名共七十二名 是は有農戸供不敷焉

開卷驚奇俠客傳第二集卷之一

東都 曲亭主人編次

第十一回 深林の孤俠意哀と訴ふ

再説館小六助則の父義隆の讐敵藤白隼人安同と今宵必殺捕て義父
 著演の狂難さの只這一拳の襖をこて豫て謀りて孝心義胆の智慧も武勇も
 健雄の夜敷の打拵精悍き貌姑峯投て赴ける時不應永十八年辛卯夏四
 月二十四日の黄昏時不不知案内多山里踰て羊腸る樹の下蔭も迷は武士の
 道直に御不察の小篠原苔滑薄鷹は山路と登りゆく程不忽地後方小人あ
 ややくや上嘯野上の小官人等せ更と喚かけり是れ小六を敬馬とて此を謀る
 氣色を厥方と信とえられ是則別人を是れ日藤澤多宿野の庭あり

那密談と竊聞せし折面善る目四郎目四郎這日の打扮の尚已時許は淫流る小妻木綿の夾衣と裾短小結と柿渋ぬる三尺帯と氣海の頭小締びたる帯の萌葱の大織絹小紺の裏脚草鞋甲脚祥も對の漆木綿黃銅種の圓瑞脩刀と瑞降り佩る左の小引提一管笠と遠く撥遣捨てちり含笑りもと接り腰と屈めて快步小六が身邊近づきたる小六も心と知るものゝ多しけりされば故意の多る面赤しく今喚被けし和郎も款柳和主の何処の人を伺へ目四郎声と密めて不吉氣つゝ死の喪あはし小可の這頭中て客店の目四郎と喚做と頼の博徒より小可の比故りて大老爺小教訓せしれ鬼胆と入目易ておん方人ありりよ密談と漏れぬのいっやん身先の先途小立ち稟る洪恩德澤は答んもの多しけり空とわられたおん身の落命せしる人の多しや恙ものいれ在さんとさるる小可事情と詳小

告稟さるるに訝しく思されん樹蔭へ立寄ぬるをといふ小六を一談及ぼ然りとて駭く先小立て小條踏むは細道へ一反のまり退せし株小尻とち掛れ目四郎も亦跟て来つち朝ひ跪せし四下とえり喃小官人嚮は小可が大老爺の慈悲德澤は悪と洗れを明の酔の醒しよ善小與して死とも辨せむおん身の伴小立ちまらんと打ち言ひしは恠々箇様々々でひ死とそ初安同小憑心れて野上史著演を陥せんと計較するその癖の趣より花水橋を著演の銅并と竊みしその折も又詰且も世有が著演の義侠德恩小先非を悔て柱小觸く死ませし又著演は禁められ小六が伴は立たれて圓金三枚を東にまゝ那日の密山談送るその身の妻小生九介年已前舊里へける假名川あゝ英直夫婦の密談を心とまゝ竊聞て小六も脇屋右少將のおん子さりと知りてよま告告知ると半响許耳死果て又いやう恠る情由さしへど

大光おほひくみ只顧ひとみふらん牙いせと伊勢の團司くわんじ許落もと遣やりんと思食おもひる當坐あたの
 決断けつだん神機しんき妙算めうざん世よ憑たもく示まさるひく義ぎとて勇いさむ心こころあつたその折せの伴ともよ
 立たちて小六せうろくが旅宿りゆうしゆくの仕つかへか去向さうきやうの思おもひはれども時日ときひのいまいまと泊とどままる宿しゆくの招寄まねする
 まで汝なの平塚へいづかなる宿しゆくの退ひりて便べんりりと等らねと町寧ちやうねいの宣のたまひせし涙なみだあふまると退ひ
 正ただしく便べん宜ぎと等らたるふ幾程いくばくもそふ牙いせの狂乱きやうらんの身み夜臥よふ房ふを脱だつ出して馬うま入いり河かの
 一ひと名な今いま俗しやくの早瀬はやせの投なげなるひ緯いとの顛末てんまつ色々いろいろと風声かぜを毎ま日ひ隠かくれおとせ亡なし
 骸かの辛からみあり。涉獵せつりやくのられしやゆへ藤澤寺ふぢざうじへ葬まうす本日けふひの穴あな竊せうの小
 可かも柩いぶたを送おくりまわらせたる胸むねの憂うれ也や朦も朧ろ也や人ひと知しるぬ歎なげれぬ霧きりの竹離たけり色いろあを
 寓方いやくはうのあを毛け獨立どくりつの夏野なつの芒本ぼうほん意いるあふ思おもひ難がたくあやう。萬夫ばんぶ無な當あの勇ゆう
 士しでも病やまひ病びやう不ふ捷せつた脊力せきりきある。知しりや是こゝの少年せうねんの身みの病びやう着きる心こころさへ乱みだり横よこ
 死しと歎なげけはとぞ。惜あやめがとても返かへらんや。小六せうろくのふりも是非せいひ不及ふ及あてとるがら

俺進退おんしんたいさへ谷やりぬ暑あつたふ藤白ふぢしろも馮ふう心こころとる密談ひそかを果はま。回くわい報ほうもせで山やまより東ひがしの
 処とろろふ那人あのひと必かな憎にくむととる。扇あふ敷しきよのやせらばつらん。それさあるふ野上ののの大人おとな
 と親おやまうるり機きと木き直ただま又また奸計けんけいと旋うりて大人おとなを敷しきんとせしべ。俺身おんみの
 惜あやむ足あしとねども大人おとなの危あや殃やうあせす。恩おん義ぎと稟うけする甲斐かひある。所詮ところ身みひさ
 底そこ倉くらる那浴館あのゆかの潜ひそか入いり。思おもひの隨まふ藤白ふぢしろと刺殺さしころして俺死おんしる。徳とくの酬むかい恩おんの
 答こたへ。是忠節こゝろの捷徑せつてい也や。後のち々々も野上ののの大人おとなの俺身おんみと義士ぎしと思おもはれん虎こを
 死しして皮かわと留とどめ人の死しと名なと送おくる呼よべとと肚裏はらの念ねん決けつめ。俛見みづかの打うち扮はれ。
 る日大人ひの賜たまひ。那三両あのさんりやうの金かねもて形かたちの如ごとく準備じゆんびし。這こ鹿か路ろの立たち躰たれ。
 暮くれ春はる果はる日ひと等ら程ほどふ。思おもひのりるはあ身みも亦また実まこと好この身み鎧よろい甲かぶも膺うら首くび両りやう刀たう腰こしふ
 跨またへ。かま山やま路ぢの赴おもむ。樹こ木きの間まよりそげれば。評ひやうしはるふ。あふもあふも
 藐姑めうこ峯ほうの湖水こすいの頭あたま。賽さいの河原かはらのあふれ。其頭そのあたまかよ。冤あや冤あや狹あや狹あや狸ねこの所ところ

為る。秋と怪と見へと去向を。下りてんは。竊は迹と跟て。半面の人左る。右る。規相。方。腰より。下。臆。嶮。山路。せ。急。歩。運。陽。氣。自然。見。魂。変。似。原。入。水。陽。致。竊。父。腸。屋。殿。寃。家。藤。白。安。同。敷。果。今。宵。這。山路。投。潛。寄。海。鏡。骨。遇。心。地。漫。喚。子。なり。人。親。欺。課。存。命。智。慧。才。子。の。逞。然。とも。方。不。故。秋。願。の。詳。明。示。縁。返。舌。輪。小。車。の。曳。甲。斐。え。俠。者。の。赤。心。の。優。健。氣。小。六。連。感。嘆。連。微妙。和。主。の。義。俠。只。一。日。の。恩。感。と。死。と。大。人。の。答。と。甘。れ。誠。の。略。と。知。れ。も。漏。せ。今。具。報。知。れ。の。意。外。の。欽。現。向。上。任。使。

然。折。折。關。視。和。主。の。面。影。忘。れ。せ。和。主。の。亦。い。く。と。俺。正。可。不。認。た。藤。白。の。回。謀。者。比。藤。澤。の。外。宿。所。の。外。張。以。て。萬。丈。心。之。屬。たり。けれ。大。人。の。面。影。声。音。さ。好。知。り。小。六。の。黙。頭。と。あ。く。隱。小。由。も。和。主。の。猜。せ。如。く。親。の。仇。安。同。を。敷。半。と。決。り。只。是。実。父。の。與。の。養。育。の。恩。年。と。思。ね。義。父。の。與。亦。仇。唯。速。禍。の。根。と。後。と。安。く。せ。と。安。同。の。鎌。倉。管。領。の。寵。臣。と。從。類。亦。ヨ。と。白。地。不。敷。捕。後。難。養。父。の。係。り。臆。と。及。び。か。け。最。も。難。義。父。の。復。讐。言。れ。世。の。人。の。俺。所。為。と。知。さ。で。敷。と。尋。思。を。あ。欺。く。親。と。詐。謀。り。是。虛。誑。以。て。罪。深。死。所。行。れ。も。詭。り。親。の。與。と。誠。の。外。は。是。則。權。謀。之。權。秤。の。鐘。の。如。く。重。を。掛。れ。

必重く軽きを掛れば必軽し。人這權を用ひされば柱の膠きまで。機臨を要す。必
 必しての宜きを尋ねてかき。既の徳を掃りか。俺が存命であるよ。知れその
 あつと。と。あつと。天知る地知る和郎の事。知れりける。便するの更。便宜のりける
 欲倚伏の糾ふ纏の如し。世の塞翁の馬あるか。俺身のちり。比を。知れりける
 俺素生。と。私主の竊聞せし。年歴て今茲。故小狹危不慮。小良。と
 る。と。ち。禳んと。俺身先横死。示し。親疎の耳目。隈。欺。たりける。
 亦是和主。知れり。奇。過世の業報。欲鬼神不測の。夜敷。れ
 伴。立人の要る。和主の這里より京師のか。世と渡れ。俺身の武
 運折。稱ふ。今宵実父の祥月忌。親の怨。雪。る。命。惜。
 然。と。も。海幸ひ。恙。なく。俺も亦京路。投て立退。べ。あ。と。首
 環會。自の。さ。ざ。の。只。い。の。好意。あ。小六。死。有。ける。と。親。兄

ゆ。世の人。中。報。る。と。過。され。る。義士と。あ。今。あ。憑。ひ。只。これ。の。
 や。と。這。義。と。あ。る。と。口。説。く。目。四。郎。の。事。亦。本。意。を。い。ふ。
 去。て。美。引。く。死。好。ま。て。も。大。老。爺。の。折。今。宵。あ。身。の。夜。敷。の。伴。小
 立。ん。と。の。い。は。れ。と。ん。身。の。落。遣。る。折。俱。と。旅。宿。に。任。と。准。備。金。三
 賜。下。小。の。空。の。り。か。恩。義。を。復。を。術。さ。大。人。の。仇。を。那。人。を。敷。と。
 以。決。め。今。獨。も。這。山。路。中。料。ら。ん。身。不。遇。さ。今。宵。の。伴。小。立。も。あ。つ。
 大。人。の。期。した。る。誓。言。も。今。又。あ。ん。身。の。稟。せ。よ。皆。搦。鬼。さ。ん。且。小。可。を
 那。首。まで。俱。と。あ。れ。必。三。椿。の。不。便。あ。の。毛。を。あ。の。と。小。六。を。眉。を
 類。單。め。て。不。便。と。の。甚。麻。る。故。と。向。目。四。郎。れ。と。小。可。の。那。浴。館。内。を
 よく。知。る。と。御。導。せ。れ。ば。是。不。便。の。一。つ。又。案。内。者。と。る。武。運。小。稱
 ふ。と。以。の。隨。小。宛。家。と。敷。を。捕。り。あ。と。那。人。の。後。類。其。由。小。去。あ。ん

火と鑽つ程小目四郎も亦腰を探りて三尺帯の間より枝を引出ま蠟燭の準備を
小六も答を言ら火と程を言まれば目四郎は左より小篠を折採て蠟燭を挿地上
植て却平坦なる石の上の件の画圖を推用せば小六も跪居て彼此とる目四郎
指さし示あり是亦尚せ浴館へ大小総て十餘間あり奥よりなる東の間の藤白
主の臥房へ這次の間近習の侍者西二名宿直となり西なる五間の奥方
と給事の婢子們并両舎三屋の歌妓們が紅粉金あり又便室ありとけ小奥
方の氣賀の館へ歸館せしめて歌妓們も皆身の暇を賜たれば這頭へ人影は
はべり又小玄閑の南の在り北の子舎の若黨處の向溜り鄰りの雜色子舎
中間子舎へ下あり浴室へ即乾の方と坪も寛二不所あり其の庭あり庭あり
這里より奥の出口あり集れ庭より入りて出居の這方を断截らば袋は東西を
探るが如く主従一個も漏れまらざるその期及び小可の奥と面亭の間の這個

杉戸と目柴ふして走入りの逃ゆる奴們ありと敷を曲てんぬ身の奥より入りて宛
家と敷を捕あか徳做まると幾人ありとも逃まるといひの毛とる小取る如く耳は示
せ小六も相々點頭て俺も如右こそ思ふれ臨機応変時宜不依るのありあれど
進退は今より茲に定めたる這画圖の現價千金目足し優る封助は誘ひ
べと身と起せば目四郎の速く画圖を眞實とて懐へ夾る程山風吹れて滅る
蠟燭とらち垂れて俱れたらうり入る山の谷河よ品堰く水の滔々と音凄ト
は夏樹立其貌姑峯楊檀の花零果て鳥夜と照さん雪もある芝種の節の比る
と降りと降らざみ私雨の雲存んとて又日雲る峰林麓軟杜鵑俺踰ゆけど
伊豆の海や澳の小嶋は又えびども有敷茶は深生生の恩仰けは高は親の親も
返を剣大刀身と捨てて武夫の名も揚羽の蝶鳥とて伊豆の藤原の曾我比
灵堂の這山本ありとすけげ肝向ふ心祈る健雄の先より聞夜夜の其



るごとく主僕快樂は餘念もろく。中記我八と再九郎の家子態く同僚の
席と譲らば女同が與ま不世と會釈もろく受戴してうち累あつて嘆む為体は傷
痛いと思ひて左腕太田藏面九郎麻太郎女用平伯の目と注し俱不安同にうち
對ひて今の世の曲子も酒の思ひ出まといへ相を忘れぬゆゑ飲量も當所の戦い
數も足らぬ敵もろく那大刀風が研立られて找む躬方はるり。俺們五名先は鬼で
船田小二郎隆友と敷み捕さる某の死のひつて又左腕太の發語も取接ぐ面
九郎起身脇の膝と找めて然之那折堀口五郎が深瘡も屈せぬ死物狂ひ小雜
兵許も敷みれかとも某烈く戦ふ。鎗めて矢庭も突付せと感せぬぬのり
死といへ麻太郎鼻春蝨めりて然之大將義隆の防箭と射盡して退れて腹と
めされ坐席と今必は這次の回であのけん。後主人が造更て家の初如くろ
ねとかわらぬ武勇の俺們五名就中義隆の死首とあり。鳥許かまろくも某

當時これを功名の第一番といふものと誇れ點頭く宮尉半田藏然之田
子勇は二の敷みれ迹立替りて首級と揚し和殿の造化も剛なり。鳥山七
郎江田藏人よりけれども其も漏さざる敷も果せぬ此侍る同僚。足野井と某が
柄と世の誼第よ家子よと。大平の日のみづろ允と人もるける上坐とあるまど。
却戰場も臨みての皆新参と看ふと恥とあるぬのヨろの相合然りとと思ふや
と過わるといひ出て空君めろろ再九郎記我八も俱お怖と。忪難る声高や
りふてもせぬ人るる。以而非廣言と眞実とある那折の俺們も馬前を拵
せし武勇と相争と知食とけり。向ふ前を大刀風とら麻非一方高柳兵庫の當
るものろり。俺們兩個相敷ふと。首と捕り。後船田鳥山江田堀口
勇士といへも深瘡も堪ぬ泥も吻く。舞は似て或の自害。刺違へる死首と捕り
めされといへ知ると思ひて歎嗚呼るると。言回せば俱は性起つ生醉同士の眼と

睜り膝推向ういと買一罵る程小事で来ぬへたえを安同やと推鎮めく。
 若們いそ酔るる俺のよとぞねか主の與身もええと敵不當る武夫役
 その一日の故もて耕さる飽まもて咬る飯は新舊ありとも忠義は新兵古
 兵もろ捷も敗るも大将の軍配に依るのめれ當時躬方の功名は皆安同
 が致を所誇ら俺と誇りもせめ天飛ぶ鷹鳥の地とまえる狗も朋輩あるの致
 を益の口論不敬おめぞや向後と佐と慎みねといれて大家青松の塩の形を
 改め額をつれて仰うけらなりぬ御免のうの酒與荒れど憶は口馬齒莧箸
 中の棒も掛らる蓐と酒菜も今一度過さる有がさるん重々過念照文の
 酔て件の如くさけるを礼と允させあひてよと異口同音の陪話一安同呵々
 笑ひて然も亦復醒さん若們も回背酒量と竭て喫ぬか過一軍の剛膽は
 左もれ右もれ捨措が死に那著演奴さるか。這里おゆるは皆腹心と逆の機

密知らぬもさけれ今ゆ隠美くもあはぬ此の派曾奴の殺さる一頭顱と接
 きて金さへ取せて遣せしふふふおけん若們のさるる一彼と向へ大家さんい
 現那もひひた入るる才あけを諾ひ稟せ一大事と做らるとも做らざとも
 けまを便りのさるる仇も知れて殺され彼備考るる心変りて逃亡したる知るべ
 らも探知もくも人も浮世の疎は這山里の兒僑居で便る。この安同領てその
 笑もゆれ鎌倉帰心今ゆ矢のぞ既お準備とさるる明日の必と氣賀へ還りく
 後日帰府の赴靴と隔て癪と搔く。憑甲斐の盗見お吊られてのめとえんも
 俺鎌倉へ還りる若演奴と結果る計畧の裁もあらん今宵の浴室の名残
 且喫むべしと引受て酌しての竭を不盡と一人別お取まれば然でも找む社伎們酒の
 人當千の敵と擇まぬ乱盃雜盃泥の如くお酔ぬもろ席の中堪ええやう安
 同の卒就寝んとも鈴釘さる身と起せぬ浮踏やと三女介がと掖扶けく

そが終小臥房に冊を入るにけり。現常言いふまの。豪家の門は瘦たは狗をく。
 農夫の廩も肥る鶏あり。安同使も奴隷も怨ある才蘭さけ酒を竊に饋と
 隠し。白濁の穴引く如く。飲食いざとあめをければ。主より先小酔臥して呼べども
 起ま鎖まき。忘れし門衝く反吐の声。心裡悲しくゆきも還り階で。基所水火
 既済の數盡す。今宵敷る命との知くぞを算と乱した。轉寐言と轉は
 牙と鼾睡の声のそ高かけり。介程小館小六も浴館の庭門を墻に添ひ身を潜
 め。目四郎が出て来ると。今夕と等程の結陰する天雲有て二十四日の月鮮明小
 頭れ出ると。瞻仰れ。丑三時候あるけり。等と久かりければ。獨連の焦燥る程は
 内より庭門を開いて。潜び出るのめ。是則目四郎小六を要時透相て首尾の
 什麼と回程。目四郎声を密ま。七さき等不承して。けり。那裏の酒宴の最中ゆく。
 時をわけ出ても来せ。躰て奥まを潜入。現小済ひ。甲夜中も知せ。画せ。如く。

婦女輩の氣賀の邸。皆かまれば。一個も。奥女主後十名のま。今宵餘
 波の酒醺と。雜色奴隷。幸方ま。酔ぬのめ。丸。年。己。前。這。浴。家。あり。
 脇屋殿主後と。敷捕たり。功名話説。子角口あるもの。藤白亦野上の大人の
 徳々とのひ出く。憎さげ。小可の噂せ。れて。生憎。嘖んと。せ。鼻。擧。撮。て。出。さ
 ぶと。せ。折。の。涙。こ。り。て。困。た。り。徳。而。只。今。夜。務。の。退。て。主。後。俱。小。酔。臥。る。睡
 端。ま。い。上。下。二。十。餘。名。ある。れ。も。要。駁。の。折。あり。あ。あ。の。七。八。名。小。過。ぐ。と。徐。入
 り。せ。の。ひ。と。辞。せ。う。く。其。に。報。る。と。う。ち。听。く。小。六。も。齒。と。切。り。原。来。這。浴。館。ま。
 量。小。先。考。主。後。の。敷。れ。あり。故。迹。より。款。處。由。易。む。今。宵。その。祥。月。忌。辰。の
 怨。と。復。す。武。門。の。眞。加。折。あり。追。薦。これ。小。優。め。あり。寛。家。の。動。靜。人。數
 ま。で。任。詳。小。少。知。る。目。四。郎。和。主。の。賜。る。非。除。衆。人。看。簞。と。も。一。念。疑。て。い
 石。小。立。ら。位。前。も。ある。の。と。漏。え。快。々。馮。む。案。内。を。せ。よ。と。喘。休。を。目。四。郎。推

鎮めく酔臥たりとも冤家の多人數徐に束ませと耳渡ら心と屬て先ま
樹の下周庭の松も昔と偲ぶ友ありて是れは是之懷舊も堪ぬ小六を敷
柄の刀の鞘釘紙潤しとや捧と甘ばと一歩と千歩とを杖とけは

第十二回 安同首と温泉舎小喪ふ 庶吉涙と死節場小賊

却説客店目四郎の小六が潜入する折先庭門の戸と引よせて戸尻の拮埒櫃と
下しけりあち逃歩のあらん折快は用心あると小六を猜しと既小名縁
類近く杖と目四郎の遠く袂と掖さ指さして這坐席より一房隔く
奥の主の臥房へ豫謀合せと小可の奥と面亭の方ふを赴くべけれ好ま
ぬと其は小六を听々點頭て俱に縁類よりうち登る小戸の一枚外へ
あり軀く其頭より杖入る幾程も安同の臥簟の頭は近づつて

次の間近羽の侍者西三名皆酔臥て枕もせを足を伸しと用事大の字小
似方もあり一個の一個の腹と枕小丁の字は似方もありと小六を這り自由か
ぞ漏亮の透間より且安同と覗ふ山里まれば蟬のあなねや青紗方亦出蚊帳と
無れ後と圓行燈の朧月光幽る浦園の上本綾の小横と打被た安同の三女介
と枕と並て臥すけ小六をこれを見て此も擬議せ漏亮と敦刺里と用て
入る程小三女介の折まをいふと熟睡とせりけん忽地頭と拾げて小六を
はく敬馬にぐる連り小玉と揺覚して賊あり賊ありと喚りて三声とも立させ
小六を枕方踏鳴りて藤白安同快起よ九十年已前今日汝を敷る
あひる脇屋陸奥少将義隆朝臣の奉為と怨と雪る俺は是源助則之豈強
人の類あるんや快々勝負と決せよと名告掛喚りる声小安同駭覚てあ
るちと枕方る刀と合せて身と起し是りと引抜く程もあせ小六を谷茂

紅蓮の花獨樂と袖本さ九の置土産宮尉才附て尋田藏經の功德不疎く貪
 錢箆平の足野井の足と破れて一足飛ぶ十方億土死生の旅羽立ち共
 祀られぬ鬼の面九も臭う。名湯の因果廻り来て死は温泉の焦熱地獄を
 面前に観る乱世の人の心は悍れ、這折雑色奴隸まで各宿酒の醒せし
 匹夫の勇と好むりのみづろ力を料や勅念する値るの皆共侶小敷されけり
 任れに王僕十五六名一個の小六砍立られて血の流るる一為体と看官に訝り
 相應かろと思ふあらん。戦ひの勝負人の言少より吉余臨きて死を
 極め敵と怕れるのの單身小十數人小當るといへども不利あり。這藤白
 黨の躬方の多勢と瀟沔の。主の與命を惜まて先と駈んと思ふのみ。加る小
 酩酊を。臥て幾程もあづけける。醉眼るれば甲も乙も敵の言少を認むて。同士
 較むとさへあづりか。を争く痛むと肩ありの言る。然る小六が勇敢武藝の千万

人小雋れ。孝義小死とたもつて。鋭氣日屬小十倍ある。大刀風小向ふれ誰
 一人も免る。命運時あり。神明仏陀の冥助あり。と云く。本意遂げ死難言る
 ま。這折茲小敷と盡つて。較も果せし宜る。ま。間話休煩。小六を豫以ひ
 隨小居。刃の仇を敷捕て。姑且息と吻せり。三月の末。敵のやあると四下小
 眼と配まとも。寂寥多と音もせられ。反る大刀と柱小當て。推直一血と拭く。
 鞆を収め。安同の臥房へゆ。ひ赴て。相れ龍陽の少年の初大刀の深瘡。息
 絶て血を塗れ。俯さる。安同のま。死る。剛才亦小六が。找あぬ。楚响の耳あや
 入りけ。やう。頭と拾けて。起んとまれ。腰立を噫。朽惜一や。と春虫動くを小
 六を争く。走り。襤褸と項と抓。引させ。席薦小鼻と捐着。々々。怒る。声を
 鳴り立。やれ。安同。ひ知る。や。汝の素より。脇脇殿。結び。怨のあり。と。ゆえ。を
 且職分。あ。ら。げ。は。不意。起。て。較。ま。る。り。是。足。利。家。の。與。る。と。栄。利。を

料る小人の忠義めき、所行きども必の鎌倉の管領小原衣賞せられて發
 迹より民の膏腴と絞めて飽きて驕奢と極め賢と媚して野上の公利と害せ
 んと計較たる老奸積悪天の憎は通り一応報行心と今助則がもかかて脇腹
 殿の冤魂と慰めたるをうへ民の蠱毒と舂拂いて世の為亦人の與心と快く
 なまの天然の右少將の記念と。這短刀の刑戮のまど下さん覚期とせよと
 必の隨ふ馬責て見りと引抜く菊一文字の短刀右も小舎直せ吐嗟と四極
 く安同を操返下仰反らして胸前禺煞と刺徹して軀と首級とを捕さける。
 恁而小六を血の溜り刃とを拭ひ收めり。彼此とええら。安同の枕方鼻紙
 其のあける是究竟と引きてそれ紙わり香盆あり下壇の料紙硯あり
 けると皆合卸して冤家の首級とち載せて西に推向け身と退かして合掌
 念をさう先考尊ヨ火并は五家臣船田鳥山江田堀口高柳們も火あ

ら。今助則が眞祭れる冤家藤白安同の首級と御食く在り世の怨と永存あり
 報恩謝徳願生菩提弥陀佛みご仏と唱れば然も勇み一健雄の心れ
 猿腸とぬるる悲しみの亦あるまらりし却あるあふれば硯管とせりとせり
 墨磨流し筆と漆て身と起り備る雲母搦の重紙戸小性心永十年。今月今
 日於此浴館被撃比之奉為腸屋右少將誅戮藤白隼人正安同主僕十數
 人者源助則と墨黒伊の大書きて憶む荒然とち笑いが忽地心小とさう。は
 せも目四郎のふあうん今でも影がふせぬいと訝。愁小面亭のさ立別
 れより敵小當り。瘡と肩ふる飲敷のせま心とる。甚そやと獨語と遠く
 圓行燈の頭る白金の燭と兼抗植る蠟燭は火と根として出て彼此と尋ふ
 面亭のさ小敷れりの尸骸は四個横りて鮮血と洗る。目四郎と這
 里のさ小敷の次の間の板席と。庵溜の通路のさある入其首小措れ鐵行

燈の頭も人ありて。嘯く声のまてければ小六の胸安らぐ。是は先後小心あつて走ると其首小到りて是則目四郎也。既痛癢と肩ふるるにけり。登時小六を声とわけてや。目四郎癢と肩ふるに安同と成聿とて。十五名敷を捕られぬ。奥の仇のわづらひた。是れは汝の仇を被て立退くべ。快々立ねと尉れば目四郎頭もち掉て。喃小官人秋秋とや。宿意は錯の居身の仇を成敷も果一玉ひとる。それふ所聞け。今生ふ念送まのもる。存命とて身も救ふ。何処ぞ立退く。小可の向の程逆謀合せ。如く。這里より奥へもくもる。雑色奴隷と敷も留て俱小志と果まのり。その中の大刀筋の捷なるものければ。憶むも膝頭を破られ。恁の癢も肩ぬが。辛くて件の敵も皆川拂て死身の與。後安くされ。この深癢といひ。せ腹を研んと出ひ。刀も合も直せ。が。いも。死身の安否と知。今下。対面も。本意遂の。趣と。听と。死ん。る。早かり。と思ひ。入。て。ひ。を。報。る。を。

小六とやあむ。目四郎今ゆ。小心弱た。と。其のひ。七。數十。所。癢。と。肩。も。也。所。を。深く。傷。られ。ね。本。復。せ。り。の。世。ま。り。況。や。和。主。浅。癢。の。も。非。除。定。業。限。の。あり。と。も。俺。恁。仇。と。敷。も。果。せ。り。と。和。主。の。助。助。も。依。り。死。身。と。も。活。る。と。も。共。侶。と。も。思。ひ。の。の。相。垂。と。て。獨。立。退。ん。や。要。る。と。と。い。ふ。ん。快。々。肩。も。被。り。ぬ。と。ら。ひ。と。恥。く。も。と。合。も。目。四。郎。聽。也。振。拂。ひ。て。御。好。意。の。有。か。死。身。と。も。最。慚。愧。く。も。り。と。も。死。身。の。と。も。扭。足。枷。も。り。る。路。次。の。障。り。あり。さ。で。り。跡。も。り。追。隊。蒐。り。て。後。度。の。難。免。れ。及。ぶ。が。然。れ。只。這。身。獨。り。と。死。身。も。俱。小。危。か。る。後。悔。其。首。小。立。と。り。情。物。を。棄。去。る。左。も。右。も。小。可。の。存。命。と。て。情。由。さ。へ。あり。と。ら。ふ。小。六。も。眉。も。ち。頻。算。め。て。死。の。易。く。も。生。の。難。く。も。絶。る。癢。の。氣。を。屈。し。て。秋。何。ぞ。の。情。由。の。あ。る。べ。し。と。い。ひ。頭。と。入。ら。ち。掉。り。て。尉。め。る。目。四。郎。の。沙。汰。の。も。と。く。思。つ。て。も。死。の。か。初。小。可。這。浴。館。偷。盜。の。與。小。潛。入。り。小。藤。白。玉。小。捕。は。れ。と。放。遣。され。つ。刺。金。十。兩。を。惠。れ。り。是。那。主。也。

慈悲ありて野上の大人を害せ死に與りぬれど這身取てその恩あるとをばくくも
 徳て介後野上の大人の徳澤義侠の濁と祛て清く就けり俺身は幸ひ藤白ま
 不幸なれども善悪邪正の差なれば他が約お背れど世の人罪とせあるべし然らん
 列の旅宿お仕へて大人お稟する恩徳お答んぬるをこととする的の外もあん身の人水お
 事皆画餅おるものか大人も危く俺身も亦措所なきなりて山も海も就き
 死命を捨て那人を殺して俱死せんと必折る料らども死身お環の命目より夜
 撃の案内お立たるは本来の面目を論お及ぶとわが今より後の命を惜て
 あん身と共お立退くは真の俠者おあらんかそこのふどこのまて藤白ま奸悪
 世の人通て知ぬもろり民の與り虎狼なれども俺身の素より怨もあべ撃られん
 頭顱と接されて養られけり那金を受たる隨お返しぬせむ方纒這折死せむ
 わが心不快らや覺期極きいこのひつ刀を合抗て腹へ貫んと突立ると小六を吐

嗟と推方林めく狼狽たる状やよ听ぬその十両の金所以死に急だと思慮浅かり
 俺身お路費の貯裏あり然も思ひ安同の尸骸の頭お十金を送して債も果
 させんお備りしもの疎鹵さよと憾め目四郎息を吻て否然とろりて外れ小可
 刃お伏せと死に藤白まの敵もあはれ徳れが追隊の沙汰お及ぶおん身の後安
 べし這も念ひ那も思ひ目今死身の一事も用放ちて往生さすあひと物の母お與
 漬りて馮心微光景お小六も只願感嘆して適りて死願忠義俠迷へ半世の
 博徒るりし悟れが一日の義士とせける自殺の覺期の健氣ゆ俺親を徳
 高た大人の教化お馮るもの飲朝お道と聴れぬ夕お死をも可きとのひけん孔
 子の教も外るも嗚呼天お命を平命を平今お林お由も平備ひ迷をてあわ
 苦痛を忍びて告よか心と屬り勲ま目四郎をなく頭を拾て否親も
 妻子も死に身は是野中の孤木の浮世の秋お先づの何処へとて送せ死言の

葉絶てあはれども。御高の大人の御庇ふりて。初ては親の恩二十年の非を知りての
 天怕た不孝の罪の。かゝる事不就て亦心係る一筋ありと恥れども。懺悔の
 為ふりやせんと笑う。とあはれ泣く。と小六を。差添てその何事か知りねども。
 快々告よ甚麻を。と辱め回れて目四郎の心と激し眼を睜りて。益々怒りて。
 同せぬ。稟まき小可故郷に在り。時年十六の春。親の家へ使れて音回と
 喚。徹ま炊婢は幾遍と。宵程の腹痛。胎おろしけり。重妻時。隠しおられ
 ども。帯を比おろし。保人の女房の訪来。折れおとせ。七支。發憤く。るた
 休を親の慈悲を物敷のせ。金にて面と張れければ。風波立を音回。中身の
 暇と取らせり。徳而音回。泣くも出ても。折物蔭に。俺身と招けて。其か。妻が
 親の上野る。新田の莊の百姓。今より後の身の往方。親里へ。送遣られて。身を
 つ小アそるべけれ。然れ。送小音。耗る。かり。妾の左。まれ。右も。われ。産も。出さ。あ。ん。の。産

る。親子の證據あり。及。二種とも。賜ね。と。ら。れ。て。有。理。と。あ。の。猛。可。は。る。を
 遣る。死。東西。這。身。の。幼。雅。かり。時。腰。護。符。付。囊。裏。小。附。ら。れ。る。迷。子。牌。と。黄
 銅。の。形。圓。金。の。似。く。り。武。藏。州。荏。原。郡。假。名。川。客。店。肝。八。之。見。子。目。四。郎
 と。鑲。着。ら。れ。し。後。々。ま。喪。ひ。も。せ。ぬ。あ。り。け。れ。年。十。五。六。の。比。う。の。夾。小。判。や。て。懐。ふ
 一日も。放。さ。さ。で。け。る。と。い。ひ。出。し。藻。塩。草。一。分。の。金。と。の。ろ。共。お。恥。て。立。音。回。取。せ。け。り
 是。一。期。の。生。別。れ。ゆ。錢。二。三。百。送。し。る。心。地。甘。い。の。後。々。ま。の。い。ひ。も。出。さ。年。を
 経。て。今。般。お。か。り。親。の。恩。子。の。往。方。さ。へ。愧。れて。果。敢。る。死。を。今。ゆ。ふ。思。心。知。と。知
 傳。ら。ち。明。て。あ。ん。身。は。痛。心。な。し。音。回。が。産。け。俺。胤。の。男。兒。女。子。後。知。ね。ど。も。恙。も
 る。て。成。長。ら。び。を。四。五。お。ろ。し。備。武。者。修。行。の。折。を。と。る。東。西。持。る。母。後。手。の
 不。圖。遇。ふ。と。あ。ら。ば。汝。が。父。の。任。務。と。生。告。も。知。さ。せ。あ。か。と。い。ふ。小。六。を。點。頭。て。その。父。の
 俺。と。あ。ら。び。の。罪。を。義。士。の。後。を。送。憾。く。あ。ら。び。落。胤。あ。る。意。外。の。致。び



大坂傳第二冊卷一

共八
 早半玉上印發又



大坂傳第二冊卷一

共八
 早半玉上印發又

乞ひの庵下人あわんぞん人鷹鬼右衛門つら喚做なごその度母あ喚入れて飯を
 美菜又這那とる養をけが最慚愧くあひつ是忠饑と凌かる人の情の憑
 肉の回を随不任と俺身のうへを敷く那人の憐愍母の精霊不備よと餅を
 取を錢も養と稀多檀那とあまむげも亦下哺も夕飯と乞小まづ折那鬼右衛
 獨ちその身け子舎を招ききてあひ子取亦慕はしと凌り口説立て頑童ませ
 とて調戲れと腹立肉罵辱ゆ突倒つ脱んせと又撥抱して放さし声を立
 つ角ひ程不其頭ああける軒磔兒の二具麻糍粉の碎けり是忠駭く鬼右衛の怨地
 声と苛立て這と丐奴が大胆多入る折を覗き俺子余不憐れり東西と竊入為
 るべし肉と趕れて逃ると相公あ磔と摧りハ下かき及罪戻且細めて後中を相公不
 稟上なれそ分説さあ伎倆の早繩圍を巻細めて杖をて猿鑢不銜せと這
 個板厨の内抱抗つ戸を閉たり折る他が朋輩多雜色の甲乙もあ見少もるふ

あれと偷見とふよる誰と憐むのら料らけける枉難小身の囚徒とより世
 人も人を恨とと申斐文縹緲物もれれ音小泣くの今中も必鬼右衛の慈悲の
 真の慈悲とて只淫慾の與るいと知と餌不寄の圈套不搦れを朽すは佳
 れが今宵更闌と慾と遂んと欲を欲然せむ主君あわびて罪なきあわんぞん
 透透とぬき出て脱去くやと尋思とあ羊来信する親世立目の御名と唱て在ける程不
 その甲夜の間の御酒宴あるを庖厨拵に勤げと人の往返の跡絶きければ毫もあ介る
 便とぬき小夜深より猛可の騷動敷き大刀立目の烈くゆえて修羅の街衢も異る
 ね俺身も俱不殺さる飲と胸の三真にて活る心地せり小事果て却金瘡人と
 思ひ這人さあ讖悔話説の洩せりより亡母親おと送されともあ合ら哀
 ちん憶ま泣声を仍り這人さあ假名川を目四郎刀袷でまはさ俺身の実父あべ
 證據の方纒られエマ那腰着の迷子牌は是と実父の記念する環會今日のありあせ

照契あせよとていぬ比母れの遞とゆひを護身囊お截りて肌膚放さぬは這里お在り是
 亦南せと遠く項お掛たる肌膚神符を披きて去り腰着牌と小六を多く受取てる燭照
 ちて左見右見の武藏州荏原郡假名川客店肝八の息子目四郎と声高お讀み且
 感且歎ひて目四郎正可お听る歎這個證據のあつたは這巡礼の少年名を庶吉と喚做は
 の和主と落胤疑ひする人告とせと喚活の声の共庶吉の金瘡人の膝と推乃着て
 死身の俺們が等々との冤屈の咎お囚れる福還て福と取てお目お拭り歎けお就て
 亦最哀れの這深瘻故の依おてきあつたは醫療は届ん左腹へ刃大と突立あつたは
 去く苦痛さそと推量おれて憑かぬ今般の對面遣いで過ぎは恸まお歎けいせと現身の
 命の限のありともる姑且の存生て思ひ限る言ふも望んぬものやよ命の喘々を揺動て
 声惜は泣はなる這回いも盡さとも張敷る限のあれ巻と更て這次の復解分ると聴か
 用卷驚奇俠客傳第二集卷之一終

